

鹿島川流域における戦国前期城館の一形態

— 四街道市北ノ作遺跡の調査から —

井上 哲朗

1. はじめに (第1図)

佐倉市から四街道市、千葉市にかけての鹿島川流域は、同川及びその支流によって台地が樹枝状に開析され、谷津を見下ろす台地先端部に占地する中世城館跡の分布が密な地域である。その縄張り構造の多くは一辺50m～100mの土塁・空堀を巡らす単郭方形を基本としたものであり¹⁾、その背後には、大字にその名が中世まで遡る集落が展開する。

ところが、平成9年度に発掘調査された四街道市物井の北ノ作遺跡の東部(A区)で検出された城跡は、斜面に多くの腰曲輪を配置する山城の形態を有し、また、方形館を基本とする古屋城跡と近接しており、当地域では特異な形態といえる。そして、検出された障子堀や大規模な井戸等は全国的にも注目される成果であり²⁾、15世紀後半から16世紀初頭の遺物群は、当地域の歴史を解明する上で、さらに、在地土器編年等の資料として有効であることが考えられる。よって、本稿では、これら注目される内容を中心に概要を報告し、若干の考察を加えたい。なお、調査時に得られた知見を元としているので、将来の整理作業によって見解が変わることは充分考えられることをお断りしておく。

2. 調査の概要 (第2・3図、図版2・3・4)

測量調査は、古屋城跡と共に平成8年度に行われ、その成果については、既に『千葉県文化財センター年報』³⁾で紹介された。その規模は、南北約120m・東西約100mで、主郭は東西・南北共約45mの七角形状を呈している。標高は主郭面で25m程、水田面と主郭面との比高は16m程である。また、西側150mに位置する古屋城跡の規模は、南北約250m・東西約180m、主郭は南北約80m・北辺約40m・南辺約80mの台形状を呈し、周囲に空堀・二重土塁・腰曲輪が巡る四街道地域では大規模なものである。

発掘調査による検出遺構は、主要曲輪2面、腰曲輪9面、土塁2条、空堀8条、溝跡15条、掘立柱建物跡11棟(今後要検討)、門跡3棟、その他の柱穴約300

基、土坑約100基、地下式坑6基、井戸2基である。

調査前の主郭内の緩傾斜は、整形区画によるもので、内側は関東ローム層を掘り込み淡黄色砂層や灰白色粘土層まで達していた。その面の掘立柱建物跡は、2～3期の建て替えが考えられる。なお、柱穴の殆どが、柱を抜かれた際に穴を破壊されている。

地下式坑は、整形区画によって天井が破壊されており、区画内には土坑を粘土で埋めた後に掘立柱建物跡の柱穴が検出された例もあり、石塔類の出土もことから、築城以前は墓域であったことが確認できた。

この主郭内に空堀状の通路を持つ大規模な井戸が検出されたが、恐らく全国的にも希有な例であろう。

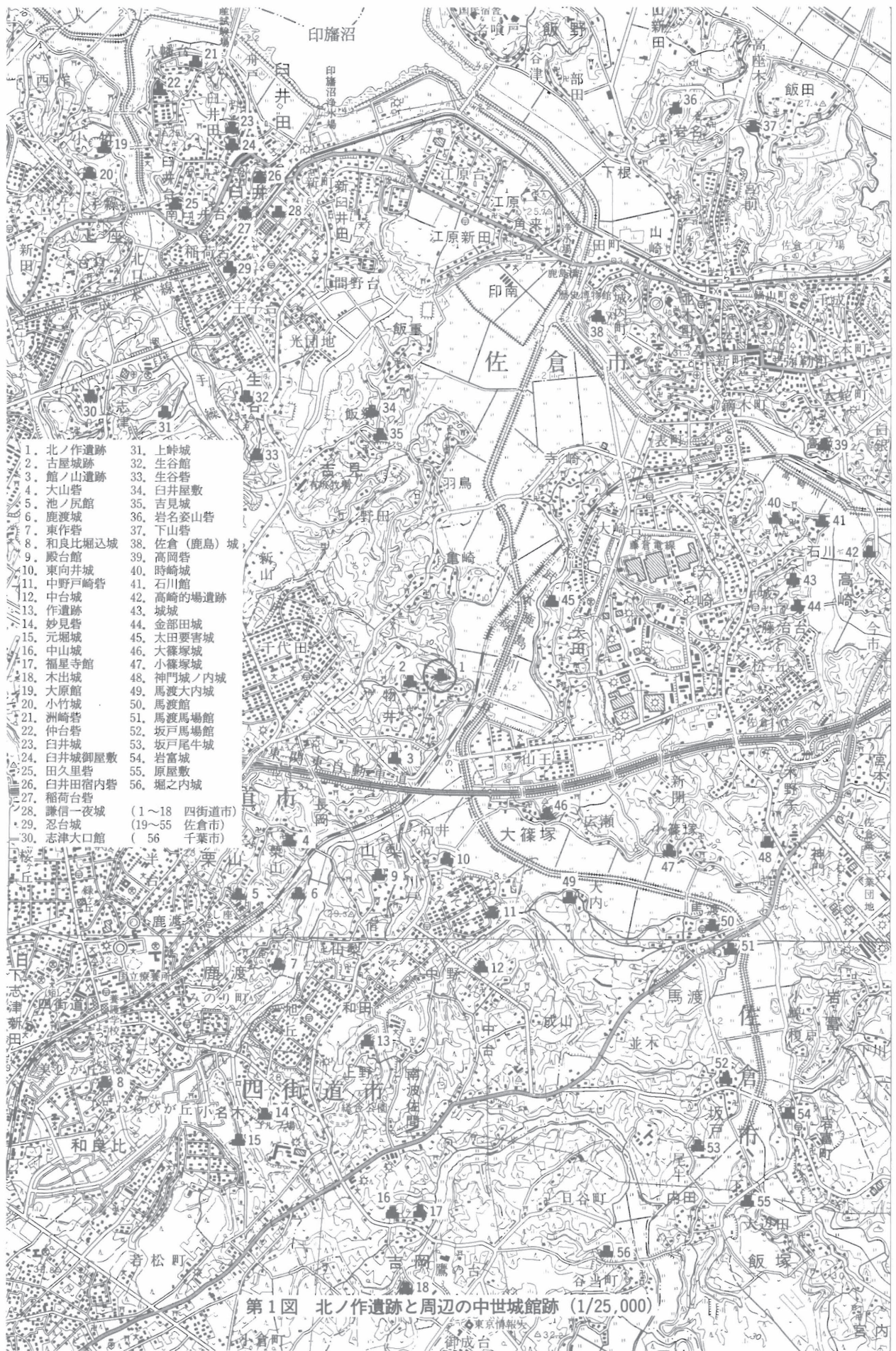
門跡は、主郭の曲輪E側・曲輪F側・南側に検出され、主郭と各曲輪をつなぐものと推測される。曲輪E側のものはその下の斜面には地山整形の階段状施設はなく、曲輪内に方形の区画が対峙するので、木製階段が考えられ、曲輪F側のものは南側から入って左に折れる通路を有する。この通路は側溝状掘り込みを有し、板がはめ込まれたことも推測できる。

また、主郭西側の空堀と整形区画の間に遺構の存在しない空間があるが、障子堀が東側から埋められていることも合わせると、ここに低土塁の存在が推定される。そして、土塁Aと空堀の間は近世以降の攪乱が激しいが、ここに大手口の虎口が推測できる。測量調査段階で虎口と考えていた土塁の切れ目から下に続く道は宝永テフラ降下後で、近世以降と考えられる。

空堀は、各腰曲輪に巡る箱堀(覆土上層に宝永テフラあり、城割で埋没か)と台地基部の障子堀である。

城の改造については、曲輪Eには当初造られた大規模な方形区画が土塁構築土と見られるロームブロックで一気に埋められていることから、主郭東側にも土塁が存在し、曲輪Gは当初は曲輪Eと連続する曲輪であったこと、また、西側の小規模な空堀SH008が埋められて曲輪Bが造成され、西から北側に大規模で屈曲する空堀SH007が造られていることも注目される。

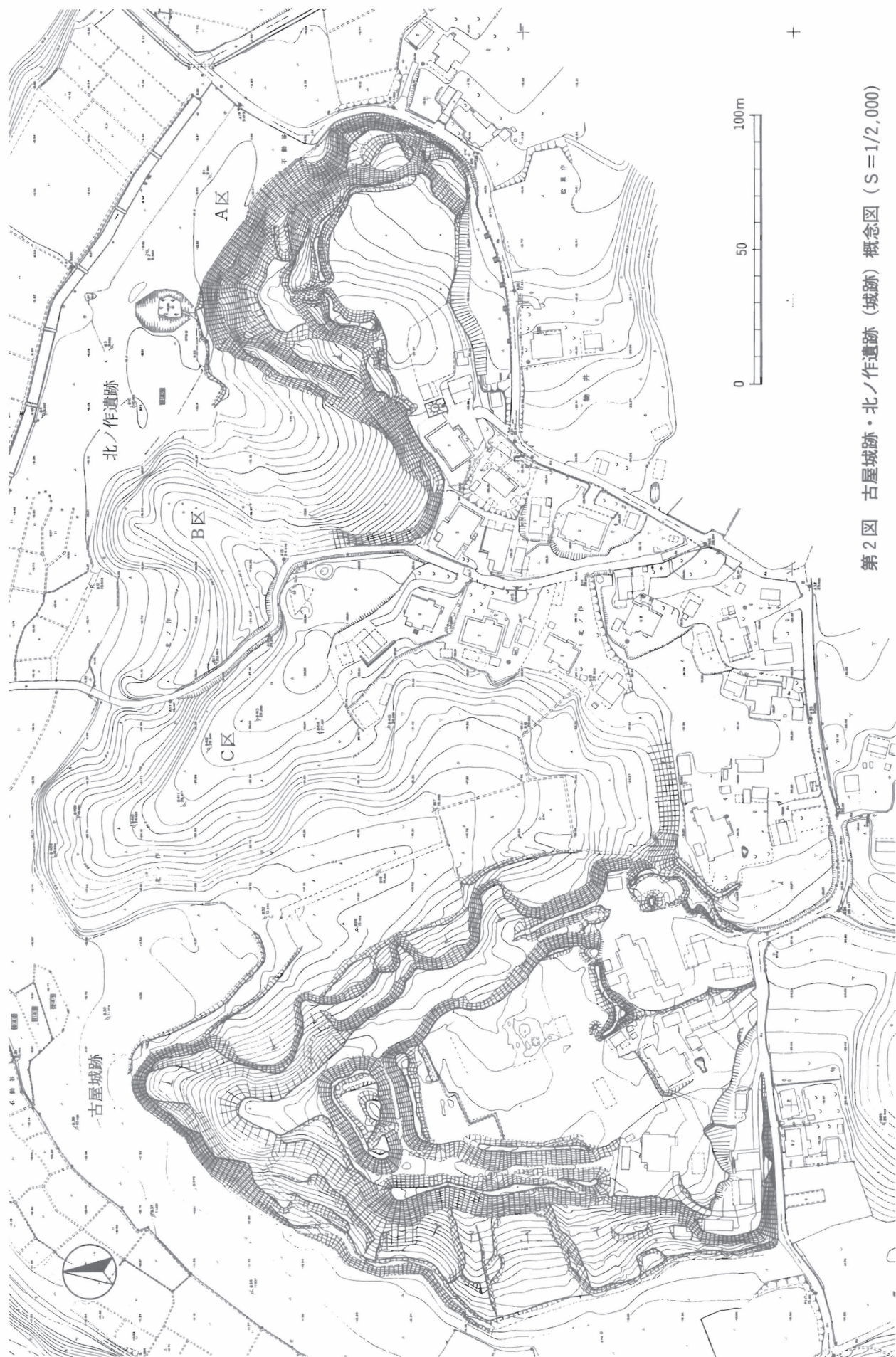
II郭については、主郭とはSH002, 003や土塁で区画



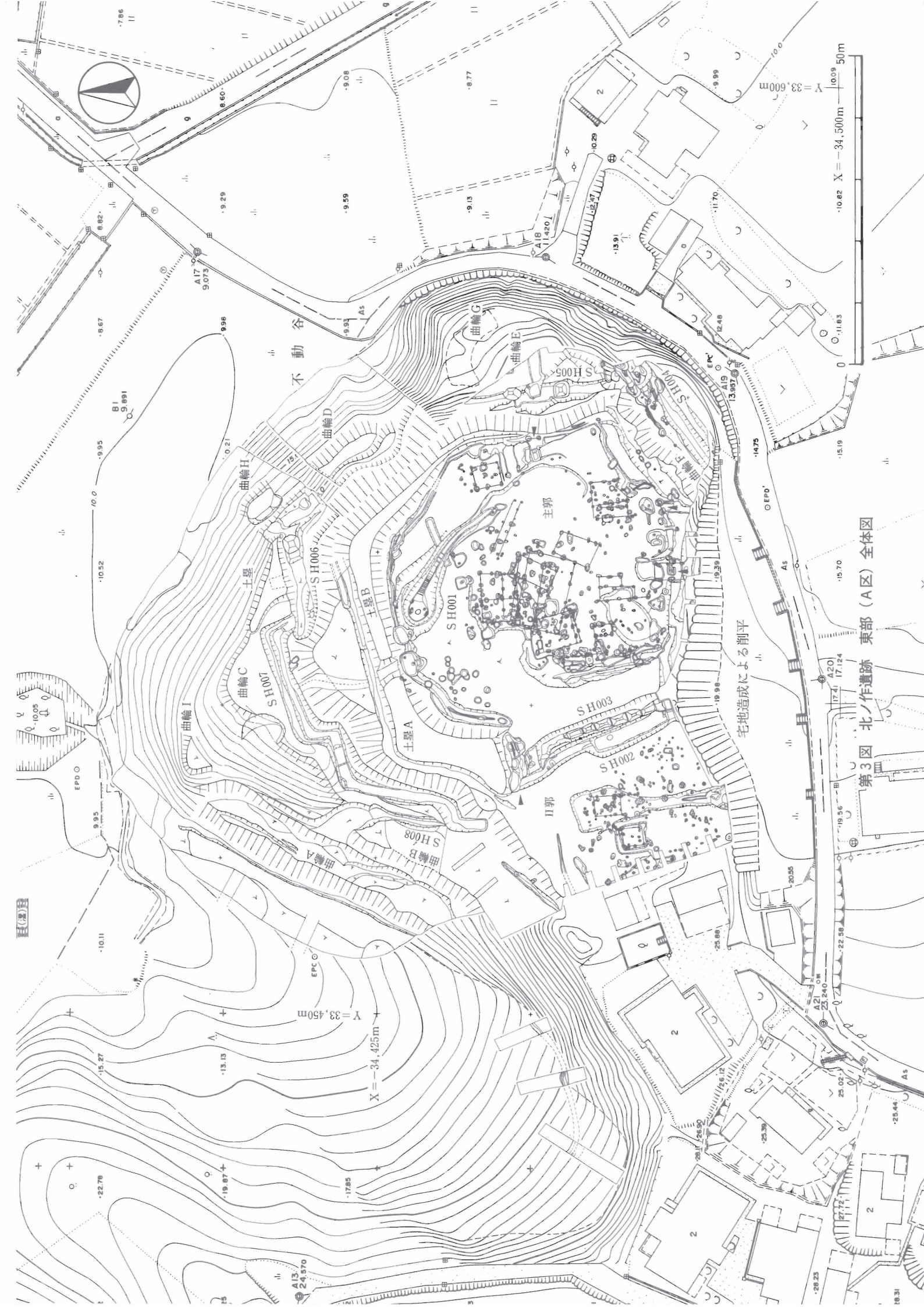
- 1. 北ノ作遺跡
- 2. 古屋城跡
- 3. 館ノ山遺跡
- 4. 大山砦
- 5. 池ノ尻館
- 6. 鹿渡城
- 7. 東作砦
- 8. 和良比堀込城
- 9. 殿台館
- 10. 東向井城
- 11. 中野戸崎砦
- 12. 中台城
- 13. 作遺跡
- 14. 妙見砦
- 15. 元堀城
- 16. 中山城
- 17. 福星寺館
- 18. 木出城
- 19. 大原館
- 20. 小竹城
- 21. 洲崎砦
- 22. 仲台砦
- 23. 白井城
- 24. 白井城御屋敷
- 25. 田久里砦
- 26. 白井田宿内砦
- 27. 稻荷台砦
- 28. 謙信一夜城
- 29. 忍台城
- 30. 志津大口館
- 31. 上峠城
- 32. 生谷館
- 33. 生谷砦
- 34. 白井屋敷
- 35. 吉見城
- 36. 岩名姿山砦
- 37. 下山砦
- 38. 佐倉(鹿島)城
- 39. 高岡砦
- 40. 時崎城
- 41. 石川館
- 42. 高崎の場遺跡
- 43. 城城
- 44. 金部田城
- 45. 太田要害城
- 46. 大篠塚城
- 47. 小篠塚城
- 48. 神門城ノ内城
- 49. 馬渡大内城
- 50. 馬渡館
- 51. 馬渡馬場館
- 52. 坂戸馬場館
- 53. 坂戸尾牛城
- 54. 岩富城
- 55. 原屋敷
- 56. 堀之内城

(1~18 四街道市)
 (19~55 佐倉市)
 (56 千葉市)

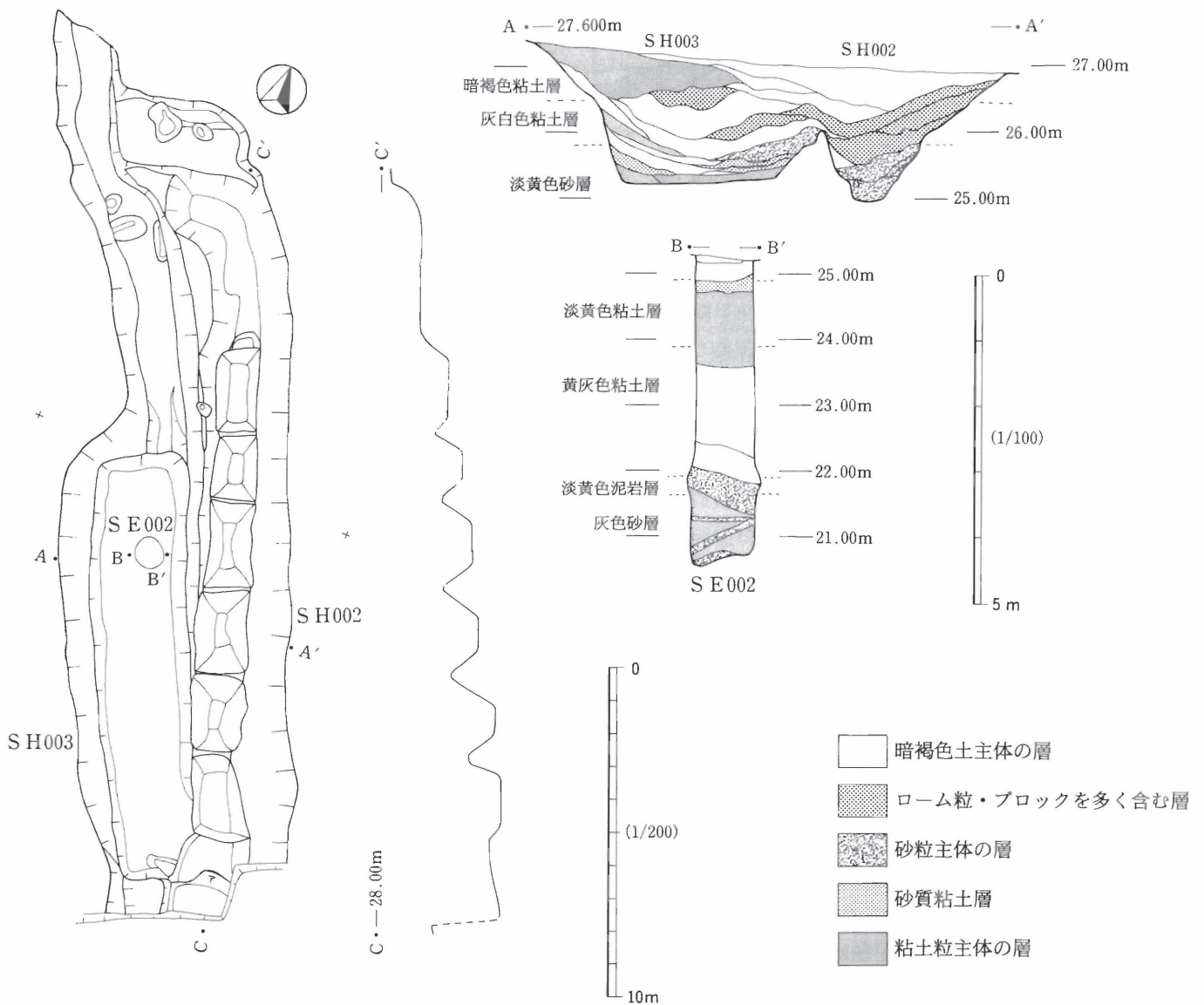
第1図 北ノ作遺跡と周辺の中世城館跡 (1/25,000)



第2図 古屋城跡・北ノ作遺跡(城跡)概念図 (S=1/2,000)



第3図 北ノ作遺跡 東部 (A区) 全体図



第4図 SH002, 003, SE002

され、外側のSH007も主郭を囲む構造であり、民家の北側の土塁状高まりは、土地所有者の削平の要望によりトレンチで確認した結果、近年の盛り土であることが判明したことから、基本的には城の本体ではないと考えられる。遺物群も16世紀後半から17世紀前半のものが多く、方形区画と道跡から廃城後に造られた堂と参道の可能性がある。地元の古老の方のお話では、子供の頃にはこの場所に薬師堂があり、主郭内の土塁A寄りに「昔は本能寺があったと聞いており、この山は本能寺山と呼んでいた。」とのことである。主郭内の「本能寺」については、土塁内側の溝や曲輪E・Fの埋土上層が出土遺物から18世紀代に下るものである他は痕跡が不明である。

斜面部については、可能な範囲で表土除去した結果、その整形が確認され、新たに曲輪D・Hが検出された。

諸条件からできたことだが、山の下までの大規模な斜面部の表土除去と整形確認は県内初めてであろう。

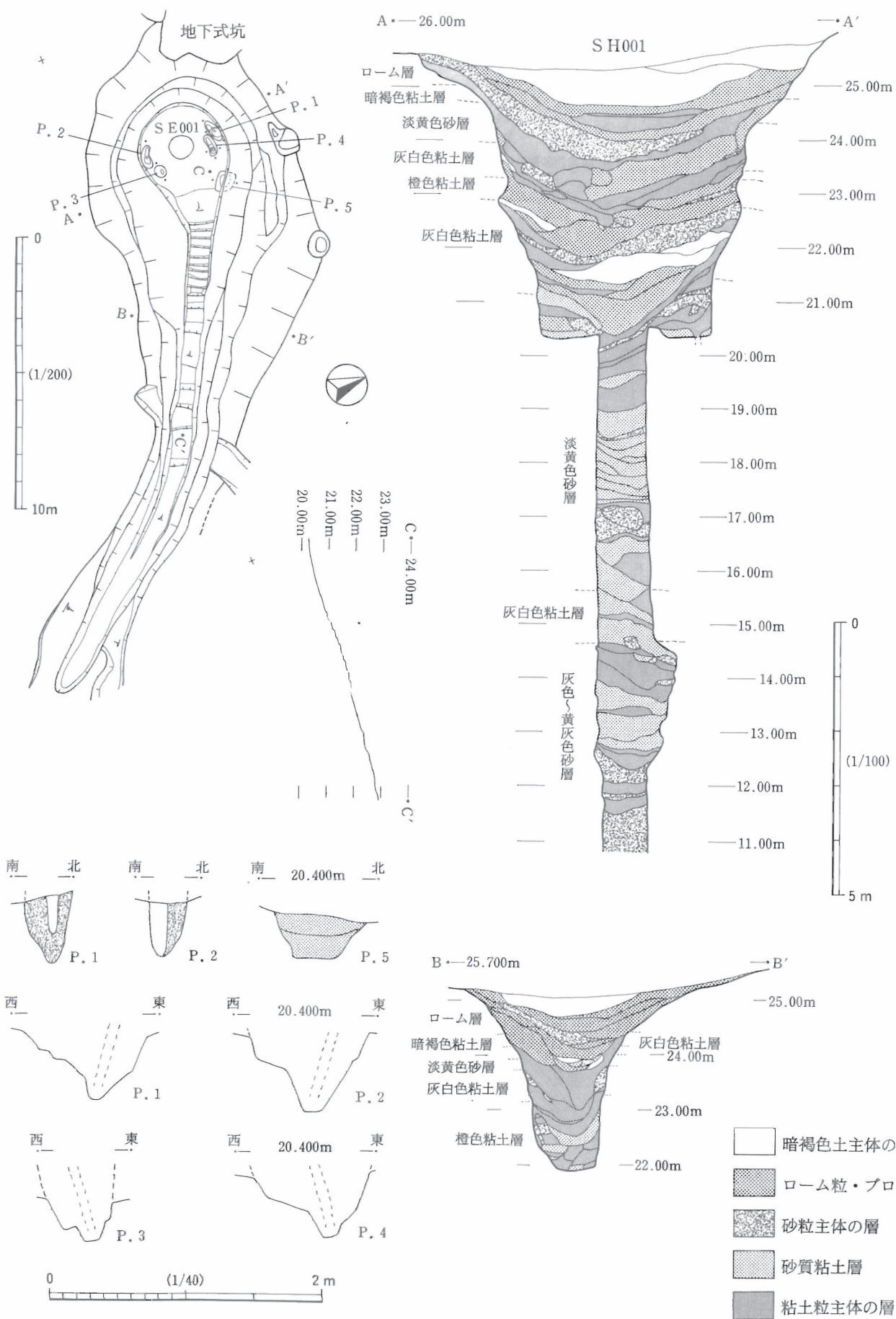
遺物については、縄文時代早期から後期土器・石器、弥生後期土器、古墳時代後期土師器・須恵器、古代瓦、中世は15～16世紀の陶磁器・瓦質土器・カワラケ・石塔類・金属製品、近世は17世紀前半と18世紀代の陶磁器・土器等が出土している。

また、B区では遺構がなく、C区では古墳時代前期と奈良・平安時代の集落を主体として、東側で中近世の屋敷跡、西側斜面部で地下式坑数基が検出された。

次に、当遺跡で特に注目される障子堀と井戸について紹介したい。

3. 障子堀 (第4図、図版4-9)

主郭の西側で深さ2m程の空堀が2条平行して検出



第5図 SH001, SE001

された。両堀の上幅は7m程である。西側(SH003)は箱堀で南側約13mは底面幅2m程であり、底に直径90cm程の素堀り井戸が掘られている。北側は浅い溝状を呈する。東側(SH002)はいわゆる障子堀で、長軸2.5m程・短軸1.5m・深さ1m程の方形の掘り込みが7つ連結する部分が約17m続き、南側に高度を下げる。これも北側は溝状となる。覆土は人為的埋土で、SH003がある程度埋まった後にSH002が掘られ、城割行為と見られる東側からの埋め立ての後、両堀共西側から粘土を主体に埋められていることが窺える。なお、両堀の覆土上層からは同一個体の瀬戸・美濃産播鉢(16世紀半ば)が出土しているので、埋め立てはこの頃であろう。土層セクションからは明確な切り合い関係は観察できなかったが、それは、SH002のSH003側の壁の崩落によるものと考えられる。

4. 井戸 (第4・5図、図版4-7・8・9)

SH003堀底の井戸(SE002)は直径90cm程の素堀りで、安全対策から周囲を広く削平して傾斜をつけさらに段状に整形して調査したが、深さは4.7mで止まった。壁面は良好に残存しており、底は平らではなく、覆土からも掘りかけて止めて直ぐ埋め戻した形跡が窺われた。なお、水は全く沸いてこなかった。

SH001は主郭内北側に検出された。平面はお玉杓子状で、長さ18mの階段状に整形された空堀状通路を持ち、郭面から5m程下まで降りて直径3m程の平場に達する。総長は25mである。当初は、土塁の内側の空堀と考えて掘り進んだが、深くなったので段状に掘り進め、最終的には主郭内の堀立柱建物跡等の調査終了後に周囲を大規模に削平して調査した。覆土は人為的埋土であり、主郭北東の土塁を崩したものと考えられる。また、出土遺物は中世以前であることから、曲輪面が機能した時期のものであろう。平場中央には直径90cmの素堀り井戸が検出され、その周囲に柱穴4基と土坑1基が検出された。柱穴4基は2基ずつ接して南北に相対するもので、確認面で柱穴痕が残り、その方向から、柱は接する2基同士は空中で交わることが推測される。つまり、その交点をつなぐ棒があれば「釣瓶井戸」の支柱と考えられる。井戸の掘削時から設置されたものであろう。さて、井戸本体の調査は、更に周囲を削平して行い、平場から9m余まで確認したが、安全上断念した。ここまですべて郭面から14m余の深さで、標高は11mまで下がったが底に達せず、水も出なかった。ただ、周囲の水田面の高さまで掘削していること

が推測される。SH002の井戸で水が出ないのであきらかに大規模な通路を伴うSH001を掘り、更に掘り進んだのではないだろうか。

5. 中世焼物類 (第1表、第6・7図)

当遺跡出土中世遺物の全体的様相は、区画別出土遺物破片数(第1表)を参照されたい。常滑焼については大甕口縁部の良好な資料がなく、貿易陶磁と瀬戸・美濃産編年を提示した。これによると、古瀬戸後期から大窯3後期段階まで出土しているが、新しい遺物は表土中からであり、主体は古瀬戸後IV期新段階から大窯1後期段階、つまり、15世紀第3四半期から16世紀初頭といえよう。

未だ接合復元も実施していない段階であるが、主な中近世焼物類を実測・提示した(第6図)。なお、古屋城跡の畑出土のカワラケも土地所有者から拝借し提示した。出土場所は特に記さない限り主郭内である。**貿易陶磁** 青磁稜花皿(2,3)は、戦国期城館跡でよく出土するもので、15世紀後半に比定できる。碗(1)は、D類で14世紀後半から15世紀前半に比定されるので伝世品であろうか。青磁はいずれも龍泉窯である。染付は、皿1点(5)のみで内外面口縁下に界線、胴部外面に列点文が描かれる。底部は基筈底と見られる。4は印西市小林城跡I郭土坑出土で未報告⁴⁾であった白磁皿(B群、15世紀前半)である。

瀬戸・美濃碗、皿 6は縁釉皿で古瀬戸後IV期新段階。7は灰釉腰折皿(古瀬戸後IV期新段階)、8は縁釉挟み皿(大窯1前段階)、9,10は灰釉端反皿(9は曲輪F出土、大窯1後段階)、11は灰釉内禿皿(西側谷内溝出土、大窯3前段階)、12は初山窯の鉄釉内禿皿(II郭内出土、大窯3後段階)、13は灰釉折縁皿(主郭内表土出土、大窯4前段階)。14は灰釉菊皿(主郭内表土出土、登窯5~6段階・17世紀末~18世紀初頭)で、量的には腰折皿と端反皿が主体である。また、天目茶碗は、15が古瀬戸後IV期新段階、16は主郭内表土出土で登窯1段階(17世紀初頭)である。

瀬戸・美濃錆釉播鉢 24,25が古瀬戸後IV期新段階。26は大窯1後段階、27が大窯3前段階である。24は曲輪F、27はSH002,003覆土上層出土である。

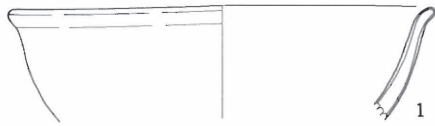
カワラケ 17は口径9.5cm・底径6.5cm・口径/底径は1.5、18は口径7.1cm・底径4.1cm・口径/底径は1.7で、両者共口径と底径の比は小さい。北ノ作遺跡では、口径7~8cm・底径3.3cm前後・器高2.5cm前後・口径/底径が2.1~2.6で、口径が大きく、胴部が内湾気味の

第1表 北ノ作遺跡(A区)区画別中近世出土遺物破片数(陶磁器は17世紀前半まで)

編年	瀬戸・美濃										瓦質土器・土器				金属製品				石製品			備考													
											常滑	内壺	埴	カワラケ	中国	寛永	他		石塔	砥	石														
																	こね鉢	耳鉢					壺	内	壺	壺	壺	壺	壺						
																														鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵
青磁皿	青磁碗	青磁鉢	付	染	陶磁	灰	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大												
15世紀後半	14C後	15C前	15C後	16C中	15C後	16C中	15C後	16C前	15C後	16C前	15C後	16C前	15C後	16C前	15C後	16C前	15C後	16C前	15C後	16C前	15C後	16C前	15C後	16C前											
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
主郭内合計	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
土塁内合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
SH02.03合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
II郭内合計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
曲輪E合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
曲輪F合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
西斜面合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
総計	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
中世焼物組成率	17.5										44.3				32.0				78	7	20														

※陶磁器については、接合したものは1として集計した。
 ※板碑やカワラケは、小片化しているので破片数が多い。II郭内の板碑63は1～2個体か。また、カワラケ167は68遺構から出土しているので、100個体ぐらいか。
 ※陶磁器の編年については、以下の文献によると共に、貿易陶磁については国立歴史民俗博物館小野正敏氏に、瀬戸・美濃陶器については、瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏に直接見て載いた。
 ・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No2 1982年
 ・小野正敏「15～16世紀の青磁碗の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 1982年
 ・藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』1986年、「瀬戸古窯址群II-古瀬戸後期様式の編年一」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』1991年、「瀬戸市史 陶磁史篇 四」1993年、「瀬戸市史 陶磁史篇 六」1998年

貿易陶磁



青磁



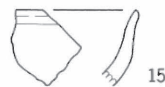
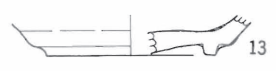
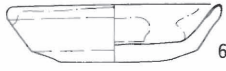
白磁



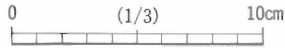
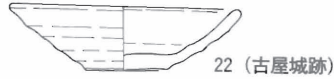
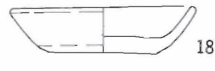
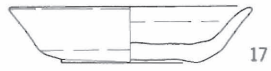
染付



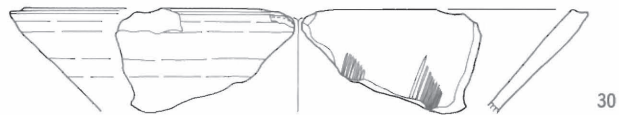
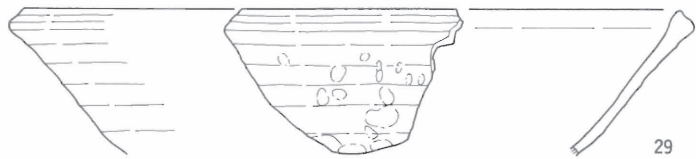
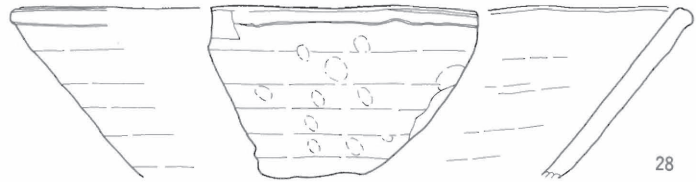
瀬戸・美濃皿，碗



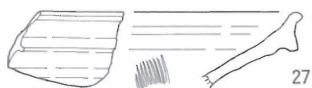
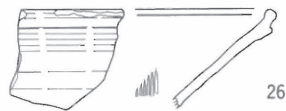
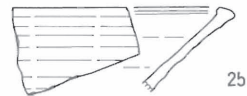
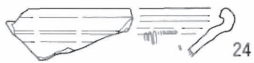
カワラケ



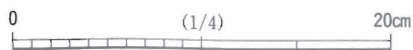
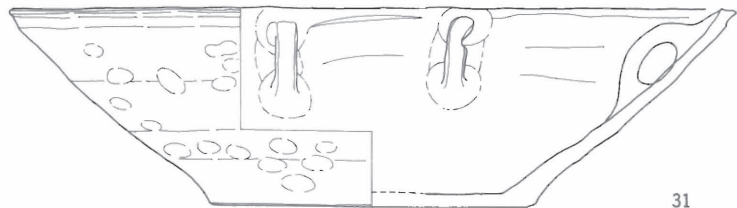
瓦質鉢



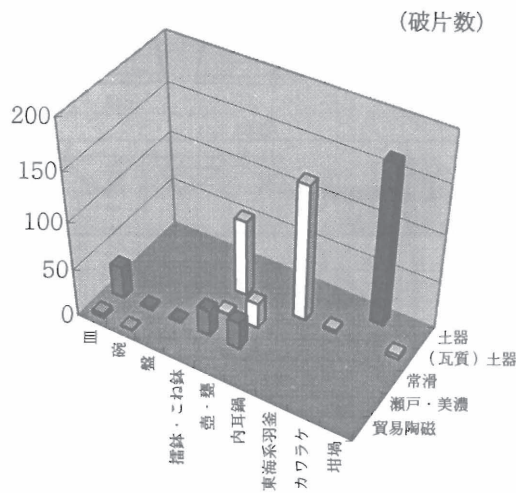
瀬戸・美濃播鉢



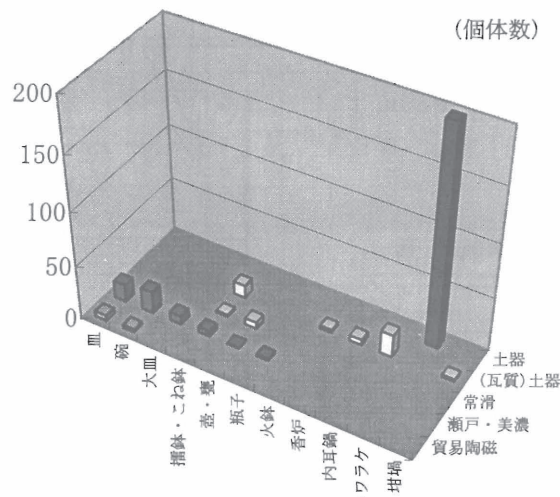
内耳鍋



第6図 北ノ作遺跡他出土の主な中近世焼物



北ノ作遺跡 (15世紀後半～16世紀初)



小林城跡 (15世紀半ば～後半)

第7図 材質・器種別中世焼物組成

破片数	常滑	124
	(瓦質)土器	199
	カワラケ	411

ものが多く(19～21)、瀬戸・美濃編年に対応する15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。古屋城跡出土のもの(22)も類似しているが、やや直線的に開くものである。23は大振りて焼成良好なもので、曲輪Fの近世土坑墓から人骨・新寛永銭6枚・漆塗碗と共に出土したので、18世紀後半のものとして推測され参考に提示した。

瓦質播鉢・こね鉢 28は酸化炎焼成で播目の無いこね鉢である。29は灰褐色でいわゆる瓦質こね鉢、30は灰色の瓦質播鉢である。口縁部の形態は、28,30が常滑こね鉢の、29は瀬戸・美濃播鉢の模倣であろう。

内耳鍋 31は、地下式坑が半没した後で人骨・永楽銭を伴って出土したもので、口径/底径が2.1でやや大きく開き、器高は10.5cmと低く、16世紀前葉の四街道市和良比堀込城跡出土のもの⁵⁾に類似する。

材質(産地)器種別組成(第7図)からは、貿易陶磁器が僅少で常滑焼きが少なく瓦質播鉢・内耳鍋・カワラケ等の在地土器が多い傾向がわかる。

参考に、瀬戸・美濃陶器から15世紀半ば～後葉に主に機能したと考えられる印西市小林城跡の遺物組成も示した。小林城跡は、北ノ作遺跡と同様、斜面に多くの腰曲輪を配置する要害性が強い城である。図示した遺物組成は個体数であり、常滑、瓦質播鉢、内耳鍋、カワラケの破片数はかなり多い。在地産土器が多い傾向は北ノ作遺跡と同様であるが、瀬戸・美濃、瓦質土器の器種が多く、常滑がやや多い傾向があり、14世紀から15世紀前半の光町篠本城跡⁶⁾とは後者に優品が多い点を除けば近い傾向が窺える。また、カワラケの形態は、①土師器の系統を引くと見られる口径12cm前後の大振りなタイプと、②口径8cm程・口径/底径が2

程のタイプ、③口径7cm前後・口径/底径が1.4と差が小さく、器高1.5～2cmのタイプに大別され、主体は③である。一方、北ノ作遺跡と同様な形態のカワラケは、16世紀前葉の和良比堀込城跡でも出土しており、古屋城跡出土のものは16世紀中葉から後葉の酒々井町長勝寺脇館跡のもの⁷⁾に類似する。

近年、関東の中世在地土器の編年研究は進展しつつある⁸⁾が、今後、下総地域の他の中世遺跡出土の遺物群との比較・検討を行うことで、地域や時期の更なる細分が可能ではないかと考えている。

6. 歴史的背景(第1図)

鹿島川は、古代より左岸側が千葉郡、右岸側が印旛郡域に推定されており、四街道地域は『和妙類聚抄』では、「物部郷」と「山梨郷」に該当するものとされる。平安時代末期より下総地域を中心に発展した千葉氏一族の一つ白井氏は、樹枝状の支谷を生産基盤にした白井庄を本拠としたと考えられている。

室町時代には、関東の覇権をめぐる、鎌倉公方足利持氏・成氏と関東管領上杉氏(幕府方)の対立で、永享の乱(1438～1439年)や結城合戦(1440～1441年)が起こり、千葉一族内でも公方方と管領方に分裂する。康正元年(1455)には公方方の原胤房・馬加康胤が管領方の千葉宗家を千葉城・多古方面で破り、以降、馬加系が千葉宗家を継ぎ、旧宗家は武蔵千葉氏となる。馬加系の千葉孝胤は扇谷上杉氏の家宰太田道灌と境根原の戦い(1478年 松戸市)の戦いに敗れ、白井城での籠城戦となる。白井城は、太田道灌の弟太田図書資忠と武蔵千葉氏自胤によって文明11年(1479)

落城したが、まもなく千葉孝胤によって奪回されたという。この文明年間は千葉宗家が千葉城から本佐倉城へ移る時期であり、或いは一時期臼井城が千葉宗家の本城であった可能性がある。千葉宗家の本佐倉城移動後は臼井城に臼井氏が入り、本佐倉城の西方の拠点として機能したと考えられる。

16世紀初頭には、後北条氏が武蔵に進出して来るが、それに対抗して永正15年(1518年)古河公方足利高基の弟義明が里見・武田氏に担がれて小弓城(千葉市)に入り小弓公方となり、上総・安房国から下総南部は里見方勢力が伸長してくる。当地域も永正17年(1520)頃、里見義道が、蕨(和良比)城を基地として本佐倉城方面を攻撃している⁹⁾。こうした動きに伴って、鹿島川を挟んで右岸の高基方の千葉宗家(本城=本佐倉城)・原氏(岩富城)と左岸の義明方の臼井氏(本城=臼井城)が対立する。

天文7年(1538年)の第一次国府台合戦以降、下総から上総北部は後北条氏の勢力圏となり、原氏は旧領であった小弓城に復帰し、さらにすぐ北方に生実城(北小弓城)を築いて本拠とする。

その後、天文19年(1550年)の妙見宮(千葉市内)遷宮において、大檀那千葉親胤の従者として「臼井の一門、志津の御門、坂戸、吉岡、小舟木(小名木)、粟山(栗山)、申台(中台)、山梨、蕨(和良比)の家風中押田、渡辺、神保」の名が登場する。「蕨」までは四街道地域の現在大字に該当する名である。また、天文23年(1554)の妙見宮新築に使用した材木の調達先として、四街道周辺では「さくら(佐倉)、臼井十二郷、ししわたし(鹿渡)、やまなし(山梨)」等があげられている(『千学集抄』¹⁰⁾)。「物井」が抜けているのは、「臼井の一門」や「臼井十二郷」に含まれていた為と考えられる。

16世紀中頃、臼井城は臼井氏に代わって原氏が実権を握ったようである。『総葉実録』¹¹⁾には、弘治3年(1557)臼井景胤が死去したが、その子久胤が若いので小弓城主原胤貞が後見し、次第に臼井領内の諸士を懐柔したとある。『千学集抄』では、千葉孝胤(1443~1505年)の三男の子右馬助が「おもいの殿」と呼ばれていたことが記されるが、『千葉実録』・『妙見実録千集記』¹²⁾等、江戸期に書かれた記録類には、孝胤の三男右馬助が物井にいて「物井殿」と呼ばれていたとある。孝胤の孫とすれば、物井殿がいた時期は16世紀半ば頃と推測され、臼井氏系列の諸城を徐々に千葉氏系にしていったことが推測される。

16世紀後半、関東は後北条氏・武田氏・関東管領を継いだ上杉謙信の三つ巴の領土争いとなり、房総の諸氏も巻き込まれる。永禄4年(1561年)には、上杉謙信の越南(関東進出)及び小田原城攻撃に呼応して里見義弘及び重臣正木大膳によって、臼井・生実両城は落城する。その後、永禄7年(1564年)の第二次国府台合戦では、里見氏は後北条氏に敗れ、一挙に下総・上総北部での勢力を失い、臼井・生実両城には原氏が復帰する。永禄9年(1566)には、上杉謙信が臼井城を攻撃し、里見氏の下総攻撃も度々行われたが、下総は後北条氏の勢力下で天正18年(1590)の豊臣秀吉方の関東攻撃、そして後北条氏滅亡まで続いた。当地域の領主は小田原城に籠城し、在地の留守部隊は秀吉方の別働隊によって無血開城となった。

以上のように、当地域は15世紀後半以降紛争の絶えない地域であった。それは、樹枝状に開析された谷津を生産基盤として小領主層が多く展開していたこと、また、生実と臼井を結ぶ河川・陸上交通の要所であったこと等が起因すると考えられる¹³⁾。

7. まとめとして

北ノ作遺跡の出土遺物が示す15世紀第3四半期から16世紀初頭は、太田資忠らによる臼井城落城、直後の千葉宗家の奪回と本佐倉城の築城、その後の鹿島川を挟んだ千葉・原氏と臼井氏の対立の時期にあたる。

障子堀は、従来、小田原城や山中城等、後北条氏系の城郭の特徴的な遺構の一つと考えられてきたが、近年、全国的にしかも多くの形態が検出されている。北ノ作遺跡と同様な障子堀は、千葉県内でも光町篠本城跡の外郭部である神山谷遺跡や千葉市南屋敷遺跡¹⁴⁾等、出土遺物から15世紀代に遡る事例が増えてきており¹⁵⁾、本遺跡もそれを傍証する資料となろう。

また、大規模な井戸や生活観のある播鉢・鍋類の大量出土は、戦乱下なんとかこの城内で生活しようとする強い意志が感じられ、在地土器に比べた貿易陶磁器をはじめとした陶磁器類の少なさは当該期の城館跡としては階層がやや低い観がある。或いは、「村の城」¹⁶⁾とまでは言えないが、領主層だけでなく物井の村人たちが一時的に避難していた¹⁷⁾可能性も考えられるのではないだろうか。その後、16世紀前葉には北ノ作遺跡の城は廃城を迎え、領主・家臣は、原氏や後北条氏下で臼井城や本佐倉城に在城したと考えられる。小林城他の廃城時期も合わせると、戦国期城館の取捨選択と大規模城郭への吸収は、15世紀後半には始まったよ

うである¹⁸⁾。

西側の古屋城跡は、1977年に主郭内の井戸の発掘が行われて、白磁碗・銅鏡等時期的に古いものが出土している。しかし、縄張り構造やカワラケからは16世紀まで下ると推測され、中世前期から戦国期にかけての物井地域の領主層の本城で、北ノ作遺跡の城はその出城的性格と考えられる。なお、物井集落の南側に位置する館ノ山遺跡は、平成9年度から発掘調査が開始され、大規模な空堀が検出されており、今後、城館跡と物井集落を含めた中世景観の復元が期待される。

以上、北ノ作遺跡の調査成果を中心に他城館跡との若干の比較を試みた。本稿が、戦国期印旛地域の歴史解明の一助となれば幸いである。

なお、末筆であるが、御多忙の中、遺物を見て戴いた小野正敏・藤澤良祐氏には、感謝を申し上げたい。

註

- 1) 筆者はかつて四街道地域の城館跡の規模・構造について集成した。『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第11集 一中島城跡・鹿渡城跡測量調査報告一』千葉県教育委員会 1991年
- 2) 途中経過は、井上哲朗「発掘調査概報 戦国時代の山城跡—四街道市北ノ作遺跡—」『房総の文化財』vol.14 (助千葉県文化財センター 1997年、鈴木定明・井上哲朗『ウォーク・イン古代4 四街道市の遺跡』(助千葉県文化財センター 1997年 等で報告された。
- 3) 井上哲朗「遺跡調査概要報告 四街道市古屋城跡・北ノ作遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.22 (助千葉県文化財センター 1998年
- 4) 井上哲朗『印西町小林城跡』(助千葉県文化財センター 1994年
- 5) 斉藤毅・宮文子他『和良比遺跡発掘調査報告書』(助印旛郡市文化財センター 1991年
- 6) 道澤明「千葉県篠本城跡の発掘と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』18号 1998年 他
- 7) 木内達彦他『長勝寺脇館跡』(助印旛郡市文化財センター 1990年
- 8) 笹生 衛「房総の中世土器様相」『史館』第23号 史館同人 1991年、白根義久「常総における中世在地系土器の展開」『考古学雑誌』西野元先生退官記念会 1996年、服部敬史「東国における15・16世紀の土師器皿様相」『八王子市郷土資料館研究紀要』第9号 1996年、同氏「内耳土鍋の研究(上)

(下)』『土曜考古』第21・22号 土曜考古学研究会 1997・1998年、同氏「土師器皿からみる中世後半期の東国」『檜崎彰一先生古希記念論文集』1998年、両角まり「内耳鍋から焙烙へ」『考古学研究』42巻4号 1996年 他

9) 年欠6月18日里見上野入道宛道哲書状「喜連川家文書案」『東京大学史料編纂所影写本』(佐藤博信「小弓公方足利氏の成立と展開」『歴史学研究』635号 1992年 に紹介された。)

10) 作成は天正年間に推定される。『改訂房総叢書 第二輯』1959年 所収

11) 作成は18世紀初頭。『改訂房総叢書 第二輯』1959年 所収

12) 『改訂房総叢書 第二輯』1959年 所収

13) 筆者は、四街道市吉岡所在の3城館跡について資料紹介した際にも若干考察した。「四街道市吉岡地域の中世城館跡について」『千葉城郭研究』第5号 1998年

14) 築瀬裕一「南屋敷遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』8 千葉市文化財調査協会 1996年 他

15) 井上哲朗「堀内障壁の分類と編年試案—千葉県内の事例を中心に—」『第15回全国城郭研究者セミナー発表資料』1998年

16) 井上哲朗「村の城について—上野国三波川溪谷の城館址調査から—」『中世城郭研究』2号 1988年

17) 藤木久志『戦国の作法』平凡社 1987年、『雑兵たちの戦場』朝日新聞社 1995年 他

18) 筆者は、「房総における中世城郭の築城から廃城」『千葉県文化財センター研究紀要16』1995年で、小林城の廃城を16世紀半ばとしていたが、小野正敏氏の指摘(「出土陶磁よりみた千葉の城館」『千葉県中近世城館跡詳細分布調査報告書II』千葉県教育委員会 1996年)と遺物群の見直しにより、現在は15世紀後半と考えている。

参考文献

- ・『佐倉市史 巻一』佐倉市 1971年
- ・栗原東洋『四街道町史 第一部 通史編』1975年
- ・柴田龍司他『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第4集 一稲村城跡・白井城跡発掘調査報告一』千葉県教育委員会 1984年
- ・大橋康二他『下総国四街道地域の遺跡調査報告書』中野遺跡調査団 1986年
- ・『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』千葉県 1998年



1. 第1段階（真上から）



2. 第2段階・近景（西から）
四街道市北ノ作遺跡



3. 第1段階・曲輪内（北上空から）



4. 第2段階・斜面部（北上空から）
四街道市北ノ作遺跡

図版 4



5. 主郭内 (北東から)



6. 主郭内 (南東から)



7. 井戸 (SH001、SE001、北西から)



8. 井戸 (SH001、SE001、南東から)



9. 空堀、井戸 (SH002、003、SE002、南から)



10. 曲輪F、空堀SH004 (西から)



11. 空堀SH007 (北東から)



12. 曲輪D、空堀SH006 (東から)